

武庫川女子大学
言語文化研究所年報

第 7 号

1995

武庫川女子大学 言語文化研究所年報 第 7 号

目 次

女らしさのイメージ 佐竹 秀雄 1

キーワード 女らしさ 性差 学生の意識 SD法

歌謡の中の日本語 ～「おまえ」「あんた」～ 西崎 亨 11

キーワード 歌謡曲 おまえ あんた

就学前の読みの意義 市川 真文 25

キーワード 就学前指導 読み方指導

店の主張 ―タウンページの広告を資料として― 岸本 千秋 35

キーワード 広告 キャッチフレーズ 業務関係のことば

彙 報

「かすか」と「ほのか」 清水 彰 1

キーワード 語義

女らしさのイメージ

佐 竹 秀 雄

1. 研究の目的

近年、性差別の問題点が盛んに指摘されている。そんななかで、「女らしさ」「男らしさ」の「ラシサ」も問題の一つとされ、「ラシサ」を求める意識が性の役割を固定化して、性差別を生み出す原因の一つになっていると考えられている。

この考えの大筋は正当なものと思われるが、実は、その「ラシサ」がどういうものであるかの検証が、十分にはなされていないのではないだろうか。日本語使用者が「女らしさ」「男らしさ」をどのようにとらえているか、それが明らかにされているとは思えない。

確かに、旧来の伝統的なラシサ観は、男と女とを対極的な存在として位置づけ、行動的、積極的な男に対して、従順で、控え目な女を、あるべき姿のように認識してきた傾向があった。しかし、性に対する考え方の変化にはかなり目まぐるしいものがあり、近年は、性に対する意識が以前とは大きく変わってきている可能性が高い。昔ながらの性意識を前提に、「ラシサ」について議論することには根本的な過ちを冒す危険がある。そうした意味から、「ラシサ」をどのように認識しているかの実態を解明することが必要であると考えらる。

ここでは、そのうちの「女らしさ」に対する意識、特にイメージの問題を取り上げる。「女らしさ」というものに対して、特に若い世代の人たちが感覚的にどのようなものとしてとらえているのかについて明らかにすることを目的とする。

2. 調査の方法

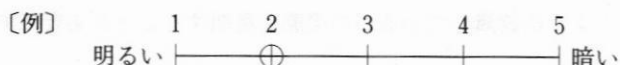
実際には、大学生を被調査者として「女らしさ」のイメージに関するアン

ケート調査を行った。現代の学生たちが「女らしさ」にどのようなイメージを持っているのかという意識を探ろうとした。

調査法としてSD法を利用した。次の枠内には、対立する意味を持つ20組のことばを示している。これらのそれぞれのセットを尺度として、「女らしさ」から受けるイメージが、5段階のどの程度にあたるかを判定して、○をつけるように指示した。

明るいー暗い	従属ー独立	丸いー四角い
冷たいー暖かい	保守的ー進歩的	細いー太い
柔らかいー堅い	内向的ー外向的	小さいー大きい
強いー弱い	活動的ー受動的	粗いー細かい
けなげーずるい	上品ー下品	醜いー美しい
繊細ーがさつ	几帳面ー大ざっぱ	憎らしいーかわいい
良いー悪い	うるさいーおとなしい	

たとえば、「明るいー暗い」の場合であれば、次の例の図に示すような数直線を示し、「明るいー暗い」を5段階に分けたときに、「女らしさ」がどの段階に位置するかを回答してもらった。仮に、明るいイメージと思えば1に、暗いと思えば5に○をつけるように求めたのである。次の例は、「やや明るい」と判断して2に○をつけた場合を示している。



また、そのほかに、次の3点についても質問した。

- A あなたが、「女らしいと感じるのはどんな人ですか」なるべく具体的に書いてください。
- B あなたは（あなたの彼女には）、「女らしく」ありたい（あってほしい）と思いますか。
- C あなたは（あなたの彼女が）、他人から「女らしい」と言われるとうれしく思いますか。

Aの質問には具体的に記述するように指示、B、Cの2点については、YES/NOの形式で回答することを求めた。

被調査者の内訳は次の通りで、総数 761人である。

- ・ 武庫川女子大学の学生…468人（女468人）
- ・ 大阪府立大学の学生……168人（男133人、女 35人）
- ・ 関西学院大学の学生…… 96人（男 38人、女 58人）
- ・ 神戸学院大学の学生…… 29人（男 11人、女 18人）

3. 調査結果(1)－全体の集計

3. 1. イメージの強さ

まず、女らしさに対するイメージの強いものと弱いものを求めよう。項目ごとに回答の平均値を出し、3を基準としてその差を出した。最も差が開くと2の値が出てくることになる。2に近いほどイメージが強く、0に近いほど弱いこととなる。そのイメージの強弱についての一覧表が、次の表1である。表の見方を説明すると、「上品 1.32」というのは、「上品－下品」の尺度の場合に、平均値が、基準の3より1.32だけ上品のほうに近かったことを示している。

表1. イメージの強さ

1. 上品	1.32	11. 良い	0.77
2. 繊細	1.22	12. 細い	0.76
3. 柔らかい	1.16	13. おとなしい	0.75
4. 細かい	1.12	14. 小さい	0.52
5. 丸い	1.10	15. 保守的	0.47
6. 美しい	1.04	16. 明るい	0.42
7. 暖かい	1.02	17. 受動的	0.35
8. かわいい	0.94	18. 内向的	0.31
9. 几帳面	0.94	18. 従属	0.31
10. けなげ	0.84	20. 弱い	0.13

イメージの強いものには、「上品」「繊細」「柔らかい」などプラスイメージのことが並び、逆に、弱いほうには「弱い」「従属」「内向的」「受動的」などマイナスイメージのことが並んでいる。

女性解放が問題にされて以来、「女らしさ」について、その内実は「男に従属し、自己主張をしない、ひっそりとした受け身の女性的なもの」であると指摘されてきた。しかし、この調査の結果を見る限りでは、そのような認識は一般的だとは思えない。「保守的・受動的・従属的」といったイメージは得点が低いし、「明るいー暗い」に至ってはわずかではあるが「明るい」ほうに得点が傾いている。

こうしたイメージの傾向が認められる理由について、2通りの解釈が可能と思われる。

一つは、学生たちの、女らしさに対する認識が旧態依然たるものだとする立場である。かつて女らしくあることをよしとした人たちが、女らしさを「保守的・受動的・従属的」なものだと認識していたとは思えない。そういう認識がないままに、女として望ましいとされていた態度や生き方を、無批判に肯定していたのではないか。もしそれならば、「保守的」「従属」「受動的」などのイメージが弱いという結果が出るのは、なんの不思議もないことであろう。

そして、もう一つの解釈は、新しい女らしさのイメージを構築しているというものである。旧来の女らしさにまわりつくイメージのうち、マイナスイメージももっていないわけではないが、それよりも、「上品・繊細・柔らかい・美しい・暖かい・かわいい」といったプラスイメージを積極的に意識しはじめたと考えるものである。性差別の問題の認識のなかで、昔ながらの女らしさがもつ保守性、受動性、従属性といった側面を知ったうえで、かつての女らしさとは違う女らしさを志向し始めたという解釈である。「保守的」「従属」「受動的」などのマイナスイメージが少し認められるが、それ以上にプラスイメージが強い点が、その反映だと考えるものである。

これだけからは、どちらが正しいのかは断定しがたい。しかし、いずれにせよ、女らしさに対して、結果的にはプラスイメージとしてとらえているこ

とだけは間違いない。少なくとも、女らしさを「男に従順で控え目である」というイメージだけでとらえるのは一般的でなさそうである。

また、表1について、もうひとつ別の視点から考えるヒントが得られることを指摘しておく。それは、イメージの強い「上品、繊細、柔らかい、細かい、丸い、美しい」が、人間の性格を表すのにも用いられるが、モノのようすを表すのにも使われることばだという点である。たとえば、ファッション関係に使われやすいことばが並んでいる。他方、生き方や態度を表すのに使われる「従属的、受動的、保守的」は、イメージの弱い項目である。これらの点で、学生たちが、女らしさをどのようなものと結びつけてイメージしているかが、おぼろげながら推測できそうに思える。

3. 2. 「女らしさ」への願望

それでは、「女らしくある」ことについて、どう考えているのだろうか。調査で、女子学生の場合は自分自身が、男子学生の場合は自分の彼女が、

- ① 「女らしくありたい（あってほしい）か」
- ② 「他人から女らしいと言われるとうれしいか」

の2点について回答を求めた。その結果が次の表2である。

表2 女らしさへの願望

①②ともYES	482 (人)	63.3 (%)
①②ともNO	139	18.3
そ の 他	140	18.4

「女らしさ」を肯定的にとらえている者が6割を超えており、否定的にとらえている者が2割以下である。学生たちの多くは、自分自身あるいは自分のパートナーに、「女らしくある」ことを望んでいるらしい。

そこで、「①②ともYES」と回答した者を肯定派、「①②ともNO」と回答した者を否定派として、両者のイメージの違いを比較してみよう。20組のなかから、肯定派と否定派の値の差が大きいものの10語を、表3として次に

示す。

表 3. 肯定派と否定派の差

イメージ	肯定派	否定派	差
1. 良 い	0.96	0.24	0.72
2. 美 しい	1.20	0.62	0.58
3. かわいい	1.09	0.54	0.55
4. 明 る い	0.52	0.10	0.42
5. 受 動 的	0.26	0.67	0.41
6. 内 向 的	0.23	0.60	0.37
7. 保 守 的	0.41	0.76	0.35
7. 従 属	0.23	0.58	0.35
7 け な げ	0.96	0.61	0.35
10. 暖 か い	1.12	0.84	0.28

これらから、次の点が注目される。

- a 否定派は、肯定派ほどに「良さ」も「美しさ」も感じていないし、
「かわいい」「明るい」とも思っていない。
- b 否定派は、肯定派より女らしさを「受動的」「内向的」「保守的」で、
「従属」のイメージとしてとらえている。
- c 両者ともに、対立するイメージの同じほうを選択している。

a、bから、両者の認識の違いを知ることができる。肯定派は、「良い」「美しい」のように、プラスイメージとしてとらえがちであり、反対に、否定派はマイナスイメージの耐え忍ぶ女を連想しがちなのである。

とはいっても、cから、両者のイメージが、必ずしも対極に位置しているのではないことがわかる。たとえば「良い-悪い」の場合、肯定派が「良い」ほうの値をとっているのに対して、否定派が「悪い」ほうの値をとっているわけではない。やはり「良い」ほうの値をとっていて、ただ、肯定派との差が大きいというだけである。さらに、上表に掲げた対立だけでなく、20組すべてについて同じほうの語が選ばれていたのである。肯定派でも、女らしさ

に、多少「受動的」「内向的」「保守的」なイメージを持ち、否定派であっても、女らしさを「悪い」と言っているわけではないのである。結局、両者の差は、イメージが強いかわいさの程度差だったのである。

4. 調査結果(2)－男女比較

4. 1. イメージの差

次に、被調査者が男性であるか女性であるかによって、イメージの差の有無について述べよう。被調査者総数 761人のうち、女性 579人 (76.1%)、男性 182人 (23.9%) である。その結果を次の表4に示す。

表4. イメージの強さの男女差

	全体	女性	男性	女性－男性
1. 上品	1.32	1.36	1.16	0.20
2. 繊細	1.22	1.25	1.13	0.12
3. 柔らかい	1.16	1.22	0.95	0.27
4. 細かい	1.12	1.17	0.96	0.21
5. 丸い	1.10	1.15	0.94	0.21
6. 美しい	1.04	1.02	1.09	-0.07
7. 暖かい	1.02	1.05	0.93	0.08
8. かわいい	0.94	0.91	1.05	-0.14
8. 几帳面	0.94	0.94	0.93	0.01
10. けなげ	0.84	0.85	0.82	0.03
11. 良い	0.77	0.80	0.62	0.18
12. 細かい	0.76	0.71	0.94	-0.23
13. おとなしい	0.75	0.79	0.64	0.15
14. 小さい	0.52	0.50	0.58	-0.08
15. 保守的	0.47	0.52	0.30	0.22
16. 明るい	0.42	0.43	0.39	0.04
17. 受動的	0.35	0.43	0.11	0.32
18. 内向的	0.31	0.34	0.22	0.12
18. 従属的	0.31	0.32	0.27	0.05
20. 弱い	0.13	0.10	0.21	-0.11

多くの項目で、女性のほうが高い値を示している。女性のほうが高い値を示すもののうちで、男性との差が比較的大きい項目は、「受動的 (0.32)、柔らかない (0.27)、保守的 (0.22)、細かい (0.21)、丸い (0.21)、上品 (0.20)」などである。それに対して、男性のほうが高い値を示すものは、「良い (-0.23)、かわいい (-0.14)、弱い (-0.11)、小さい (-0.08)、美しい (-0.07)」の5項目である。

これらの項目を見比べると、かなり明白な差異が認められる。女性の高い項目である「受動的、柔らかない、保守的、細かい、丸い、上品」などが、性格的なものを表しうのに対して、男性の「良い、かわいい、弱い、小さい、美しい」は、外見的なものを表すことが多いという事実である。この内面性と外面性という点に、女らしさに対する、男女が抱くイメージの差があるように思える。

さらに言えば、女性の高い「受動的、柔らかない、保守的、細かい、丸い、上品」のうち、「受動的、保守的」は、男女全体としては低い値であった(表1参照)。全体で低い値の項目で男女差が大きかった(女性>男性)ということは、男性が非常に鈍い反応しか示さなかったことを意味する。男性にとって「受動的、保守的」なイメージは、とても弱いものにすぎないということになる。つまり、男性は、女らしさという語に内包されていると批判されてきた受動性や保守性をあまり感じていないことを示しているようだ。

これらの事実からは、男性のほうが、「女らしさ」に対して、無批判的に外見上の問題として認識しているように推察される。

4. 2. 願望の差

それでは、「女らしくある」ことへの願望についての男女の差はどうだろうか。

女子学生の場合は自分自身が、男子学生の場合は自分の彼女が、①「女らしくありたい(あってほしい)か」、②「他人から女らしいと言われるとうれしいか」についての回答の組合せを、男女で比較しようとしたものが、次の表5である。

表5 女らしさへの願望の男女差

	女性	男性	全体
①②ともYES	359 (62.0)	123 (67.6)	482 (63.3)
①②ともNO	112 (19.3)	27 (14.8)	139 (18.3)
そ の 他	108 (18.7)	32 (17.6)	140 (18.4)

表5によれば、肯定派（①②ともYES）の割合は男性のほうに多く、否定派（①②ともNO）の割合は女性に多いように見える。ここにも、男性のほうが、「女らしさ」をより強く求めている傾向があるように思える。ただし、カイ自乗検定をしたところ、 $\chi^2=2.31$ （自由度2）で、有意差は認められなかった。つまり、統計的には男女における差を確認できなかったのである。しかし、男性に「女らしさ」の肯定派が多い可能性は否定されたわけではない。今後の研究課題と思われる。

5. おわりに

女らしさのイメージを見る限り、現代の学生たちの多くは、女らしさに反発をしていないし、マイナスイメージも持っていない。それどころか女らしさを良いものと考え、目指し、憧れているとさえ推測できる。

こうしたイメージが、昔ながらの女らしさの延長線上にあるものなのか、現代ふうの新しい女らしさなのか、この調査だけでは断定しがたい状況にある。ただ、学生たちにとって、「女らしさ」ということばがイメージするものは、人間の生き方や態度よりも、もっと表面的なものである可能性も考えられた。この点については、別の角度からの女らしさについて研究をすることが必要だと思われる。

また、男女差に関しても、統計的な差は認められなかったが、なんらかの差はあると推測される。特に、男性の側に外見をより重視して「女らしさ」

をとらえようとする要素があると思われる。

なお、今回の調査での質問「あなたが、女らしいと感じるのはどんな人ですか。なるべく具体的に書いてください。」に対する集計については、ここでは報告できなかった。近い機会に分析結果を発表したい。

付記 調査を実施するにあたって、本学国文学科の教員の方々のほかに、田中宗博氏（大阪府立大学）、大鹿薫久氏（関西学院大学）、伊藤茂氏（神戸学院大学）の協力を得た。ここに記して謝意を表する。

また、この研究は、平成7年度文部省科学研究費補助金（一般研究C）による研究「女らしさ」の意味・用法・イメージの研究」の一部である。

（本研究所教授）

歌謡の中の日本語

～「おまえ」「あんた」～

西 崎 亨

1

寿岳章子氏が『章子のことば教室』（「かもがわブックレット」）の中の「民主主義と『お前』」の中で、「私は胸のすくお話しを西光夫人から聞いたのです。どんなてきびしい内容の会話でも、西光さんは決して妻を『お前』とよばず、『あなた』だったそうです。さすが、ほんものの解放者です。私は常日頃ひそかに、わが妻に『お前』などという人は、表面上いかにすきの無い民主主義者に見えても、どこかうさんくさいと思っているものですから、とてもうれいでした。」と書いている。因に、同氏は『日本語と女』（「岩波新書」）の「私のお前史」の中で、「私にとって『お前』ということばは、理解語彙でこそあれ、使用語彙ではなかった」と書く。

『女性の呼び方大研究』（遠藤織枝編・三省堂）の第一章「好きだから『おまえ』なんて一パートナーの呼び方」の中で小林美恵子氏は「……………私は夫に限らず人に『おまえ』呼ばわりされたくないし、人を『おまえ』とも呼べない。たまたま『おまえ』を使ってしまうのは、どうしても言うことをきかない娘や息子たちにいらだって、『おまえはどうしてそうなの』と怒鳴ったりするときぐらいだろうか。それは後で考えると、あきらかに親であることをかさに着て、子供たちを押さえこもうとしていたと、反省せざるを得ないような場面である」と書く。更に、「『おまえ』『おれ』と互いに呼び合うような（特に男性どうしの）親しい関係もあるにしても、『おまえ』は一般的には上位に立つ者がその立場を権威として振りかざし下位者に言うことをきかせようとする関係の中での呼称である」と記す。これは、「対等もしくは下位者に対して用いる。親愛の意を込めて用いる場合もある」（『日本国語大辞典』）に符合する。

ところで、対称の人称代名詞には種々のものがある。『角川類語新辞典』によると、「対称（相手をさす代名詞）」(502)に「貴方・あんた」以下19語、「(502-a)」(目下の相手と呼ぶ語)に「君・お前」以下9語を列挙する。

以下は、昭和歌謡に見られる対称の代名詞についての浅見である。

2

本調査は『昭和歌謡大全集』（成美堂出版）－昭和元年～昭和64年の600曲－、『歌謡大全集』（同）－平成元年～平成7年の36曲－の計636曲を対象とした。

	昭元～19	昭20～39	昭40～59	昭60～平7	計	割合
あなた		1	8		9	1.4
君	12	19	41	31	103	16.2
お前		2	19	14	35	5.5

表1 男性の女性への呼称

	昭元～19	昭20～39	昭40～59	昭60～平7	計	割合
あなた	8	18	124	82	229	36.0
君	3	16	2	1	22	3.5
あんた		3	1	4	8	1.1

表2 女性の男性への呼称

表1および表2は、男性の女性への、あるいは女性の男性への呼称について、語別にその表れる曲数を示したものである。対象の呼称として、外に「あいつ」があるが、用例のみを示しておく。

男性 ⇨ 女性 ひとりひとり あいつもひとり（ひとり・昭52）

男性 ⇨ 男性 あいつがやれば僕もやる（上海だより・昭13）

女性 ⇨ 男性 あいつなんかもう愛してないわ（ぼやぼやできない・平3）

男性の女性への呼称の見られる曲147曲、女性の男性への呼称の見られ

る曲258曲における各語の割合は、

① 男性の女性への呼称

あなた	6.1%
君	70.1%
お前	23.8%

② 女性の男性への呼称

あなた	88.8%
君	8.5%
あんた	2.7%

のようになる。「あなた」「君」は男女両用の人代名詞として用いられているが、その使用割合は対照的である。以下、各語について考える。

3

先ず「あなた」について。

「あなた」が男性の女性への呼称として用いられた例は、「あなたとゆっくり遊びたい」(若いお巡りさん・昭31)・「あなたがぼくをまっている」(ブルーシャッター・昭42)・「あなたがいつか話してくれた」(岬めぐり・昭49)・「あなたは少女の時を過ぎ」(青春時代・昭51)・「人波に紛れる貴女を見てた」(ルビーの指環・昭56)・「あなた明日が見えますか」(さざんかの宿・昭57)等である。因に「若いお巡りさん」では、「家出をしたのか娘さん 君の気持ちも分かるけど」「タバコを下さいお嬢さん 今日是非番の日曜日……あなたとゆっくり遊びたい」と「あなた」「君」を使い分けている。この点については後に更にふれる。「ブルーシャッター」以下の例は恋人(親しい女性)への呼称例である。

ところで、『基礎日本語2』(角川小辞典)において森田良行氏は、「あなた」を次の様に分類する。

□ 上位者に対する「あなた」

(1) 特定の相手に対する「あなた」

(2) 不特定多数の相手に対する「あなた」

二 同等もしくは下位者に対する「あなた」

(1) 男性の場合

(2) 女性の場合

三 夫婦や恋人同士の間の呼称。特に女が男を呼ぶ場合に用いる「あなた」

四 手紙文で用いる「あなた」

以上の分類で、当該例はもちろん三に相当するものである。同書は三に説明を加えて「会話ではなく、文章の地の文や、詩歌、歌謡などで用いると、恋愛関係にある二人か、夫婦同士を意味する」として、「有楽町で逢いましょう」「女のみち」「世間は二人のために」「港が見える丘」を例としてあげる。因に、これらの例中の「あなた」は女性の男性への呼称である。

ところで、同氏は二(1)で「親しい男性同士の場合はむしろ『きみ』、学生や生徒同士では『きみ／お前』などを用い、『あなた』は一般的でない。女性に対してと、親しくない相手へのよそ行きの言葉には用いられる」とする。

先にふれた「若いお巡りさん」では「家出をしたのか娘さん」を「君」と呼称し、「死ぬほど心配してるだろ 送って上げよう任せておきな」と続ける。「タバコを下さいお嬢さん」を「あなた」と呼称し、「職務尋問警棒忘れ あなたとゆっくり遊びたい 鎌倉あたりはどうでしょうか」と続ける。「君」については『角川類語新辞典』の「男性同士、または男性と女性との間で対等または目下に、親しみを込めていう」に符合する。一方「あなた」については、「お嬢さん」が『おじょうさま』より少しくだけて、親しみのこもったいい方(『日本国語大辞典』)には符合するが、「よそ行きの言葉」(森田前掲書)には符合しない。 女性の女性に対する「あなた」と女性の男性に女性に対する「あなた」の使用比率が1:24と言う点では、女性の女性に対する「あなた」は一般的でないのは事実であろう。

次に「君」について。

女性の男性に対する呼称としての「君」と男性の女性に対する呼称として

の「君」の使用比率は1:4である。女性の男性への呼称としての「君」の例は、「君に捧げた純情の」(女の階級・昭11)「さよならさよなら君いつ帰る」(夜のブラットホーム・昭22)「君に捧げた純潔は」(長崎エレジー・昭22)「君に逢ううれしさの」(水色のワルツ・昭25)「君は遙けき相模灘」(江の島悲歌・昭26)「君のみ胸に黒髪を」(この世の花・昭30)「君を頼りに私は生きる」(ここに幸あり・昭31)「君の情けに咲く花ならば」(東京の人よさようなら・昭31)等々あるが、「君」と呼ぶ人と呼ばれる人の関係はそのいずれもが恋人同士あるいは愛人関係にある間柄のものである。

ところで、男性の呼称としての「君」と女性の呼称としての「君」とには差異があるのか。

君と出逢った香林坊の	(加賀の人)	男性⇒女性
君に逢ううれしさの	(水色のワルツ)	女性⇒男性
君の帰りを待っていた	(モナリザの微笑)	男性⇒女性
君いつ帰る	(夜のブラットホーム)	女性⇒男性

等類似のフレーズの用例での比較して、特にその意識上の差異は無いように思われる。

「あなた」と「君」とは、女性から男性へは「あなた」、男性から女性へは「君」という傾向が一般的であることはその用例数の示すところであるが、恋愛関係にある二人の場合においては、例えば「君」に「目下の相手と呼ぶ語」(『角川類語新辞典』)に分類されるが「目下」と言う意識は全く無く、「親しみ」を込める表現と見るべきであろう。

次に「お前」について。

「お前」については、「お前頼りにのり切って」(愛馬進軍歌・昭14)「銅鑼よお前が知るばかり」(玄海ブルース・昭24)「今日もお前とつなぐ舟」(おんな船頭歌・昭30)「ギターお前をつまびけば」(ギターを持った渡り鳥・昭34)「お前も泣いて」(達者でナ・昭35)「なア酒よお前にはわかるかなア酒よ」(酒よ・昭63)の様に、「馬・銅鑼・月・ギター・馬・酒」を擬人化し、

「お前」と呼称する例、母親が息子に対しての呼称例に「お前もいつかは世の中の」(おふくろさん・昭46)、母親が娘に対しての呼称例に「他人(ひと)にきかれりゃお前のことを 年のはなれた妹と」(花街の母・昭48)「今日はおまえの晴れの門出だよ」(祝い酒・昭63)の様な例もあるが、他の用例は、恋愛関係にあると思われる二人、あるいは夫婦同士の間の呼称として、男(夫)から女(妻)への場合に限って見られる。

昭和40年以前は、「可愛お前にゃいつまた逢える」(俺は待ってるぜ・昭32)「お前一人の身ではない」(お座敷小唄・昭39)程度しか見られないが、40年以後にその用例の増加するのは特徴的である。「うぶなお前が可愛いと言ったあなたは憎い人」(夢は夜ひらく・昭41)「死んでもお前を離しはしない」(女のためいき・昭41)「俺もおまえも新宿そだち」(新宿そだち・昭43)「おまえのほかになだれもない」(おまえに・昭47)「やせてやつれたおまえのうわさ」(くちなしの花・昭48)など。「おまえ」の用例は男性から女性に対する呼称の場合に限定される。

女性の男性への呼称として「おまえさん」が一例見える。「おまえさんには色気がないとかわいあの娘が口惜しがる」(どうどうどっこ唄・昭42)。「おまえさん」の例は近世以後見られる。「マア少しお待ち遊ばせ。おまえさんには、チトあつうございませう」(式亭三馬「浮世風呂」)「何もお前さんの思案一つと母親がお美尾の産前よりかけて、万づの世話にと此家へ入り込みつつ」(樋口一葉「われから」)「お前さん何時か左様(さう)言ったね」(同「同」)「お前さんの紙漉きも久しいもんだね」(徳田秋声「あらくれ」)「お前さん、知らないのかい。そら、あの何とかいふ保険会社の方だよ」(永井荷風「腕くらべ」)「お前さん。怪我アしなさらなかったのか」(同「墨東奇譚」)等々その用例は多い。

「おまえさん」について『日本国語大辞典』には、「江戸時代には、一般社会でも遊里でも使用され、かなり高い敬意を表した。庶民階級で、妻がその夫を呼ぶ時にもある」とあり、「おまえさま」の補注に『『おまいさま(さん)』『おめえさま(さん)』『おまさん』『おまはん』など種々の形が見られ、語形が崩れるにしたがって敬意も下落している」ともある。当該「おまえさ

ん」は妻の夫に対する呼称ではない。男性が「あの娘」と呼ぶ関係から、男性にとっての特定の若い女性による呼称である。現在普通は聞かれない。

次に「あなた」の訛音としての「あんた」について。

「やっぱりあんたもおんなじ男」(どうせひろった恋だもの・昭31)「あんたないてんのネ」(だから言ったじゃないの・昭33)「みんなあんたに上げる」(おひまなら来てね・昭36)「私はあんたを忘れはしない」(ラヴ・イズ・オーバー・昭58)のほか、「恋唄綴り」(平2)「雨の大阪」(平3)「火の国の女」(平3)「東京」(平5)などがある。因に、「だから言ったじゃないの」のみが女性の女性への呼称であるが、他の例は女性の男性に対するものである。

「あんた」については、『日本国語大辞典』には「現代多く下位者に用いる。東京では卑俗な言い方であるが、関西ではそうではなく、親愛の気持で言う」とある。因に、『浪花方言』に「江戸で云あなたなり、あがめいふ言葉也、又云、我より目上の者を通して己(コチ)のあんたなどいふ」とある。

4

以上、各々の呼称について単独に見てきたが、次に各呼称とその呼称者の自分自身の呼称との関係についてみる。

◇対称「あなた」自称「わたし」

「貴方もわたしも買われた命」(カスパの女・昭30)「あなたの熱いくちづけが・私の胸をゆするのよ」(夏の日の思い出・昭40)

◇対称「君」自称「ぼく」

「星を数えた君と僕」(北上夜曲・昭36)「君は僕の心の星 君は僕の宝」(星のフラメンコ・昭41)

の様に、男性を「あなた」と呼ぶ女性は自らを「わたし」と呼び、女性を「君」と呼ぶ男性は自らを「ぼく」と呼ぶ場合が圧倒的で、『角川類語新辞典』にも見えるが基本的な形である。因に、女性が男性を「君」と呼称する女性も

自らを「わたし」と呼んでいる。例えば、「柱に寄りそいたたずむわたし
さよならさよなら 君いつ帰る」(夜のプラットホーム・昭22)「君を頼りに
わたしは生きる」(ここに幸あり・昭31)など。

◇対称「君」自称「われ」

「はれやかな君の笑顔 やさしくわれを呼びて」(青春のパラダイス・
昭21)「君は鎌とれ我は鎚」(ああ紅の血は燃ゆる・昭19)

◇対称「君」自称「おれ」

「惚れていながら行くおれに・君の幸せ祈りつつ」(哀愁列車・昭31)「君
より切ない この俺なのさ」(霧にむせぶ夜・昭43)「君と出逢った香林
坊の・静かに俺を待ってる町だ」(加賀の女・昭44)「もし君とキッスで
きたら俺街中を逆立ちしたまま」(100%……Soかもね!・昭57)など
の外、「無錫旅情」(昭62)「悲しみは雪のように」(平4)など。

「ああ紅の……」のみが男性(学徒)同士の呼称であるが、他の例は恋人
同士あるいは恋愛関係にある二人の間での呼称である。

『あいさつ語辞典』(奥山益朗編)には、「おれ」に「同輩またはそれ以下
に対して用いる自称代名詞」とあるが、自称の「われ」は掲出しない。『角
川類語新辞典』は、「われ」に「文章語」、「おれ」に「口語・男性語」と位
相を示す。『基礎日本語2』は「われ」については「現代語では文語的表現
として用いる」とするのみだが、「おれ」については男子の親密な間柄での
用語とする。次の用例との関係で更に考える。

◇対称「お前」自称「おれ」

「可愛お前にゃいつまた逢える・俺は待ってるぜ」(俺は待ってるぜ・
昭32)「俺もおまえも新宿そだち」(新宿そだち・昭43)「おまえと酒が
あればいい 飲もうよ俺とふたりきり」(ふたり酒・昭55)「お前が俺に
は 最後の女」(みちのくひとり旅・昭56)「泣いたおまえが可愛い 俺
がいつでもいるから」(ギンギラギンにさりげなく・昭56) 等々。

『角川類語新辞典』は「お前」に「普通、男同士。男から女にいう。同等
あるいは目下にいう。ぞんざいしない方。日常語」とし「おれ」の対意語と
する。「俺」に「同輩またはそれ以下に対して使う。やや乱暴ないい方」と

する。『日本国語大辞典』の[補注]に「自称の『おれ』は、中世以降使用され、特に近世以降多用された。貴賤男女の別なく用いられたが、近世の後半期頃から女性の使用が絶えた。同等もしくは目下に対する使用例が多いが、目上に対する用例もあり、江戸期までは現代語のように特に悪いことば、卑称とはいえない」(「おれ」の項)とある。

上記の様なことは、現代語の「お前」「俺」に確かに認め得るであろうが、当該例のような、恋愛関係にある男女間の場合には、当然上下関係での用法ではなく、親密さの表現であろう。仮に「おまえ」と「おれ」とが「ぞんざい」で「やや乱暴」と一般に意識されるならば、それは「より親密さと親愛感」の表現を意図したものとみるべきであろう。したがって、上に示した対称「君」自称「おれ」の「おれ」、「俺」に返すつもりならば 捨ててくれ・人波に紛れる貴女を見てた」(ルビーの指環・昭56)のごとき対称「あなた」に対する自称「おれ」の「おれ」などは、「やや乱暴」であっても「おまえ」に対する「おれ」とは違った、「照れを押し隠そうとする気持ち」の表現ではなかろうか。

◇対称「あなた」自称「あたし」

「愛したひとはあなただけ・あたしの恋人」(逢いたくて逢いたくて・昭41)「お馬鹿さんね あなただけを信じたあたし」(ラブユー東京・昭41)「あなたはわるい人ね・ダメなあたしね」(経験・昭45)「あたし酔えば家に帰ります あなたそんな心配しないで」(氷雨・昭57)

◇対称「あんた」自称「あたし」

「やっぱりあんたもおんなじ男 あたしはあたしで生きてゆく」(どうせひろった恋だもの・昭31)「あたしせつないの・みんなあんたに上げる」(おひまなら来てね・昭36)「あんたとならいつ死んでもかまわへん・あたしが本気で惚れたひと」(東京・平5)

◇対称「あんた」自称「うち」

「うちはあんたの夢をみる」(火の国の女・平3)

上例の「火の国の女」は「肥後の国」を舞台とする歌であり、熊本県下でも用いられる自称の「うち」は当然といえば当然ではある。因に、この関西

を中心として関西以西でも用いられる「うち」は、婦女子が用いる。

「あたし」は「わたし」よりも「ややくだけた語感を持つ」(『日本国語大辞典』)口語であり、「あんた」も「あなた」よりも「くだけた」口語であり、本来の語形の崩れは親愛の気持ちと親密の度合いの表現を表すものであろう。東京では「あんた」は卑俗な言い方であり、その点では例えば、対称「あんた」に対する自称「あたし」の持つ温かな親愛感はどう理解されるのだろうか。

◇対称「あなた」自称「僕」

「あなたがぼくをまっている」(ブルーシャトー・昭42)「僕には出来な
いまだ愛してる あなたは大人の振りをしても」(危険なふたり・昭48)

「あなたがいつか話してくれた 岬を僕はたずねて来た」(岬めぐり・
昭49)「あなたがいま望むなら・僕には泣きたいくらい恋人」(恋人・平
5)

◇対称「お前」自称「僕」

「僕のはころびぬえるのは・おまえのほかにだれもない」(おまえに・
昭47)

「あなた」とも「お前」とも呼ぶ対象に自らは「僕」に対応する。「僕」は一般には「男性が対等およびそれ以下に対して使用する日常語」であるが、恋愛関係にある男女間ではその意識はなかろう。ただ、「あなた」に対する「僕」と「お前」に対する「僕」とでは、その「僕」の表現意識には差異があろう。「お前」に対する「僕」には、「俺」に近い意味あいがあるのではなかろうか。

5

次に、対称の呼称が同時に見られる例を示す。

◇「あなた」と「お前」

「お前一人の身ではない・貴方ひとりが欲しいのよ」(お座敷小唄・昭
39)「うぶなお前が可愛いと 言ったあなたは憎い人」(夢は夜ひらく・
昭41)『「あなた」』『おまえ』夫婦みち」(命くれない・昭62)

◇「あなた」と「君」

「あなたに『さよなら』って言えるのは・みんな君の人生だねって言って」(22才の別れ・昭50)「あなたをつかまえて泳ぐの・すねて怒る君も可愛いよ」(小麦色のマーメイド・昭57)「君は素敵だから一人で平気さ・みんなそう あなたのせいよ」(嵐の素顔・平1)

6

歌謡の中の対称の代名詞には、以上に示す様に「あなた」「君」「お前」「あんた」が見られる。それらの語の意味・位相について『角川類語新辞典』は次の様に記す。

- 「あなた」 男女両用。目上・対等の相手に対していう。日常語。対意語(わたし)
- 「あんた」 同輩以下にくだけていう。口語
- 「君」 男性同士、または男性と女性との間で対等または目下に、親しみを込めていう。日常語。男性語。対意語(僕)
- 「お前」 普通、男同士。男から女にいう。同等あるいは目下にいう。ぞんざいなお方。日常語。対意語(おれ)

「あなた」以外の語に共通する「上から下」への意識が始めに記した寿岳章子氏などの「お前」に対する視点に結び着くのであろうが、本稿で取り上げた恋愛関係にある男女間、あるいは恋人同士の間、夫婦の間などの場合には必ずしも上に見る様な視点は当てはまらないのではないだろうか。

小学館のPR誌『本の窓』(創刊号)に次の様な記事がある。

池上 私に教えている留学生が、私に向かって「あなた」と言うんです。なんて失礼な。そこで、その学生に「あなた」は目上の人に対して使う代名詞ではないと教えると、辞書に「尊敬」とあったと言う。たしかに、「あなた」は、多くの辞書に「尊敬の意を込めていう呼び方」と書いてある。つまり、こういう説明だけでは実用にそぐわない。(略)

林 (略) 日本語の実態では、「お父さん、あなた！」と言ったとき

には、もうすでに親子喧嘩なんです。

池上 夫婦喧嘩のときは、「あんた！」じゃないでしょうか。「あなた」には、まだ優しさがある。

林 戦争中に、『父よ、あなたは強かった』という歌が流行して、そのときすでに問題になってるんですよ。日本人は、父親に向かって「あなた」とは決して言わない、と。

「あなた」について、『大辞泉』には「①対等または目下の者に対して、丁寧な、または親しみをこめていう。」とし、特に「現代語では敬意の程度は低く、学生が先生に、または若者が年配者に対して用いるのは好ましくない。」と注記する。②として「妻が夫に対して、軽い敬意や親しみをこめていう。」とする。

「あんた」は『『あなた』よりくだけた感じの語』（『大辞泉』）、「『あなた』よりぞんざいな言い方」（『学研国語大辞典』）、「現在は『あなた』を軽くいったことば」（『あいさつ語辞典』）等の様にあるが、元の語形が崩れることによって、自分と相手との一体感を表すことは多い。例えば、

好きおうて一緒になった仲やない あんた遊びなはれ 酒も飲みなはれ
あんたが日本一の落語家（はなしか）になるためやったら うち
はどんな苦勞にも耐えてみせます （浪花恋しぐれ・昭58）

に見える対称「あんた」、それに対する自称「うち」には夫婦間の「親しみ」と「慈しみ」と「敬意」とが感じられ、ほのぼのとした温もりが伝わってくる。

『日本語と女』の中で寿岳章子氏は「『お前』の一種の安定感は何とも言えない。否、『お前』にこそ、夫婦の醍醐味がある」との「お前」を巡っての一方の極の礼讃派を認め、「近頃の若い人の一部には、『お前』があつてこそ夫婦は安泰ということばの意味合いがわからない人がある。『お前』はたしかに強者的な、少し大仰に言えば、一種のヒエラルキーを獲得している者が下の者に声をかけるときのことばであるだけに、うまく行けば、立派な殿様が良民にあたたかい眼差しを注ぐような、穏やかな雰囲気溢れた夫婦の状況を表すことばとなり得る。」とも記す。

7

歌謡を題材に、特に対称の代名詞の使われ方について略述して来た。

寿岳章子氏の『章子のことば教室』と『日本語と女』とで「お前」の意味はかなり明かになるが、現代の多くの「国語辞書」の記述は満足 of いくものはない。「ことば」は時代・場所・状況によって使い分けられ、同じ「ことば」でも意味が付加され、異なった意味合いを醸すことがある。「国語辞書」は紙面の制約で多角的な説明の不可能なことは十分承知はしているが、実用にそぐわない説明のあまりに多いことも事実であろう。そして、不用意な「辞書」の使用は誤った見方を知らしめることに繋がる。

親子間の「お前」と夫婦間の「お前」と恋人間の「お前」とでは、同じ「お前」でもその意味合いは異なる。

同じ「あんた」でも夫婦喧嘩の時と日常会話の時とではその意味合いは異なる。

同じ恋愛関係にある二人の場合でも「あなたに……」「お前に……」「君に……」「あんたに……」とでは、相手に対する思いは異なる。

代名詞一つにしてもその記述的研究の必要を痛感する。

就学前の読みの意義

ーフランスの入門期指導論4ー

市川真文

B.Bettelheim は、難読症について次のように指摘する。

そうした人々にとっては、子どもの頃の最初の、またそれにつづく読書体験は、個人的に自己を投入できる体験ではなかった。逆に、読書はなんらの深い意味も持たぬ、文字や言葉や文章の単なる知覚という本質的に受動的な体験であった。

読むことに関連してなんらかの不安を抱いているために、あるいはそれが全く退屈な体験であるがために（読書が与えてくれるものに対して個人的に関与できなければ、読書は退屈である）子どもは読書を学ぶことに積極的に抵抗するかもしれない。そのような子どもにとって、読書は自分の真の興味とは無関係のものである。

この指摘は、いかにも精神分析家のものらしい。Bettelheim にいわせれば、最初期の読書体験が、以後の読書生活に大きな影響を与える。「楽しくもなく他の価値ある報酬を与えてくれるわけでもない課せられた作業」としての読書に接近していった子どもは、「読書や読書が与えるものをできることなら避けたいと思う」ようになるのである。しかも、それは決して珍しいことではない。

だが、逆にまた、「文字の解読やその他の技術の訓練を受けることなしに、就学前にあるいは就学後に読めるようになる」子どもたちも多くいる。

そうした子どもたちは本を読んで聞かせてもらっているうちに読書欲を抱くようになった子どもたちで、彼らは程度の差はあっても、授

業で教えられるものとは関わりなく家庭で読むことを覚える。本を読んで聞かせてもらう楽しみを知る子どもは、本が好きになる。読書に対する親たちの関心や、親たちが自分に読んでくれるときの楽しいげな様子に影響されて、子どもは熱心に、自分を魅了するストーリーを頭にくぎさみつける。それから全く自発的に、彼は言葉を拾い出し、親や兄弟の助けを借りて言葉を識別するようになる。

この子どもたちは、「『言葉が読める』といういわばうつろな能力」の蓄積の果てに、読書の世界に入っていたのではない。最初から読書や文学を楽しむという「子どもの自発的な欲求の結果として」読む技術の学習が行われ、文字や言葉が読める能力と読書や文学を楽しむ、意味あるものを理解する能力とが並行的に習得されていたのである。

ここで重視しなければならないのは、どちらの場合においても、読み方教育の入門期以前の体験、すなわち就学前の段階での読書にかかわる体験が重要だということである。それは家庭であったり、保育園や幼稚園であったりするのだが、就学以前に「読書への深い関心を培われた子どもたちは、学校で読むことに苦勞しない」。たとえば、兄や姉の読書をテーブルの反対側から眺めているうちに文字を反対に覚えてしまった子どもの例を挙げて、「学校に入ると、はじめは言葉を本来の形で読むのに苦勞するが、読書への関心が植えつけられているので、すぐにそれができるようになる」という。さらに、読書への関心から読むことを学び始めた子どもたちは「圧倒的に後により読者となる者たちの大部分を占める」のだが、実のところ「学校の教え方が結果として生んでいるのは、あまりに多くの子どもたちが、そのときにもまた後になってからも、読書の意義を見出せずにいるという事実」だとするならば、実質的に読書入門は、学校以外の場と学校以前においてなされているといわねばならない。

結局、Bettelheim のいうことは、読むことの意義や機能についての経験が読むことを方向付けるのであり、そのオリエンテーションは就学以前に行われており、小学校はこの点において無力だということだ。読みの学習にお

いては、その技術的な側面が軽視されることはあり得ないが、しかしまた、読む技術が読む行為の発達の重要な鍵となるのでもないのである。にもかかわらず、学校の読みの学習は読む技術の練習に終始しており、読書や文学の楽しみから子供たちを遠ざけている。だから、多くのよい読者は、「その子供たちが学校でさらされている体験にもかかわらず」よい読者になるのだとまでいう。

Bettelheim はアメリカの学校と子どもたちを主なケース・スタディとして、読みの学習について論じているが、同趣旨の指摘は、フランスの幼児教育の場でもなされている。就学以前の子どもたちの読む能力の基盤的な発達、読みにかかわる経験、さらには読みの学習そのものが、小学校での読みの学習に大きく、深く影響を与えていると考えられている。こうした点について、より包括的な形で、教育行政の側からの提案もされている。

フランス文部省は、すでに一九七七年に、「幼稚園と小学校準備級との教育的連続性 (Continuité pédagogique entre l'école maternelle et le cycle préparatoire de l'école primaire)」という通達を出し、同年に公示された文部省令(「小学校準備級の目標と教育課程 (Objectifs et programmes du cycle préparatoire des écoles primaires)」)が「小学校準備級で行われる基礎学習に関して、この基礎学習のために必要な心理的成熟の状態をつくりあげる上で、幼稚園、特に年長組の諸活動が重要であることを繰り返し強調」していることの趣旨を徹底させようとしている。そして、幼稚園においては、やはり同年の通達「幼稚園について (l'école maternelle)」に示された教育指針を尊重すべきことを述べて、フランスでの幼稚園—小学校、とくに年長組と準備級のあいだの連続性を確かなものにしようとしている。

もっとも、この幼稚園—小学校間の連続性の強化には、フランスの学校制度固有の条件も与っている。フランスには落第制度があり、準備級では約20%が留年しているといわれているが、七七年のグロシャン委員会の報告によれば、就学前教育の経験の有無が、明らかに小学校での落第と関連をもっている。同様の結果は、七三年度の中等教育学校一年生を対象におこなった文部省の調査にも現れている。それによれば、幼稚園に2年以上通ったものは、

その約6割が落第をせず小学校を卒業するが、通園経験のないものにあつては約4割にすぎない。逆に、小学校で2度以上落第を経験したものは、2年以上の通園経験をもつものでは4.5%、通園経験のないものでは、9.1%である。こうした調査結果から早急に結論を導くべきではないが、フランスの「機会平等主義」にもとづく諸政策の中で、アビ文相による教育改革の一貫として、小学校における修学効果に著しい不均衡をきたさないためにも、年長組と準備級との連携が焦点となったといえる。また、制度の上からもフランスの幼稚園は初等学校とみなされている。このため先の通達では、Bettelheimの指摘した、家庭を主とした就学前の発達の環境の重要性よりもいっそうふみこんだ、幼稚園の予備教育的な役割を明らかにすることになったのである。

つまり、学習技能習得の準備期間として、年長組—準備級をひとまとまりととらえて、幼稚園でも「学習上必要とされる事柄に応じうる最適な手段を豊かにもつ指導を行う」としている。「ひとりひとりの子どもの精神的・身体的かつ社会心理学的なあらゆる潜在能力を最適に発達させる」ことが幼稚園の任務であり、幼稚園で培われた潜在能力が、「小学校でのこの（読み・書き・計算）基礎学習の質と大きくかかわっている」とされる。したがって、「読みや計算に関するあらゆる学習の過程を、もっぱら準備級以後に行われることだと見なして幼稚園から排除することは避けるべき」だということになる。

けれども、これは、読みの早期教育、Bettelheimがいう読みの技術的側面の学習の幼稚園からの開始をいうものではない。そうした学習は「時期尚早というおそれだけでなく、子どもたちの人格の調和のとれた発達を促進し、より正確な学習と豊かな発達の潜在力を保障するそのほかの諸活動を犠牲にするおそれがある」。幼稚園ではあくまでも「園児の表現力をかきたて続け、園児の活動力を生かすこと」に努めるべきで、「学習の目標とする能力の習得を中心的な関心とした訓練を実施するということは、幼稚園の教育目的ではない」のである。むろん、読みの基礎にかかわる学習が成立する条件を子どもたちが備えている場合、読みの学習が展開されることになるが、その場

合も「懸案の学習を条件づける心理的能力の発達と成熟に役立つことを第一の目的とした活動から生まれてくるべきであり、故意に学習が実現されるようにしむけられた教育実践をめざすべきではない」と、あくまでも子どもたちの諸活動の中から、読みの学習の方法と材料を見つけだすことをといている。

具体的に「幼稚園について」では、この時期の子供たちのことばの学習について「(発達に関する研究成果をふまえ) これまでに述べた発達過程の規則を考えあわせる時、身体から直接発現する自我の表現形式のことごとくを教師は十分に活用しなければならないことが明らかとなろう」と述べて、自発的な表現活動から学習が展開されることを基軸にしている。そして、身体運動や絵画などの造形的な活動を含め、何よりも話し言葉による表現から書き言葉へと導くにあたって、次のような項目を示している。

三歳頃から、幼児は自分の書いた字や友達のそれに意味を与えようとする。この自然な行為が起点となって、幼児はアルファベットを身につけることになる。そこで、①書く記号の役割とその性質を理解し、②それらを実際に書き、③諸種の音声を記号文字に対応させ、④時間の中で展開される話し言葉と、左から右へと空間の中で展開される書き言葉の間の関係をとらえるために、書く記号と話し言葉を文字で結合すること等ができるように指導すべきである。

子どもの内発的な行動、しかも書かれたものに意味づけるという読む行為の本質に深くかかわる行動から出発して、文字の習得へといたることが示されている。読みの技術的な側面は後にまわされ、読みの、そして文字のもつ機能についての体験が先行している。しかも、子どもの発達の全体性をふまえた項目だてになっている点に、発達教育学の視座を重視するフランスの面目がある。

発達の観点は、これまでの幼稚園における文字習得の問題点を踏まえて提示された五項目の目標に、より鮮明な姿で現れている。

話し言葉から書き言葉へと移る際には次のような目標が設定される。

- ①イメージを注意深く見てメッセージを記号化し、その意味を知りたいという情緒に関する目標。
- ②音韻に関する目標—年少組のころから違う音、同じ音を聴き分けるように指導すべきである。聴覚上の弁別は視覚上の弁別に比べてはるかに微妙であるため、各種の遊戯を子どもに提供する必要がある。この目標は、機能的遊戯と訓練とが渾然一体となった珍しいケースである。
- ③運動神経系統に関する目標—子どもはアルファベットの記号を左から右へと読みながら書き写すことができないなければならない。ほとんどの場合、この目標は五歳六カ月から六歳にかけてやっと正確に達成されることが実証されている。
- ④記号に関する目標—各自が解釈する多義的記号にはじまって、子どもは記号の意味に関する規則や慣習の必要性を理解しなければならない。しかし、この慣習は学級という集団内のみで有効であるから、ぜひ習得しなければならない任意の記号を使用する必要性を子どもに認めさせるべきである。
- ⑤結合に関する目標—この目標は表象機能の発達と結びついており、表象機能は多数の要素を同時に克服する可能性を与える。また、表象機能は音韻の結合を習う五歳六カ月から六歳にかけてようやく現れることが実証されている。

ここには、G.Mialaret が読み方学習のレディネスとして分析した六項目などに見られる発達研究の成果が盛り込まれている。Mialaret の場合、読み方学習のレディネスを次のように分類している。

- 1 身体的発達の一般的条件
- 2 社会的条件と感情面
- 3 知覚的運動機能の条件

- 4 言語にかんする条件
- 5 空間の構造化にかんする条件
- 6 知的水準にかんする条件

「1 身体的発達の一般的条件」は、広く学習活動にむかううえでの条件であり、「6 知的水準に関する条件」は、読み方学習の成就の可能性にかかわる条件であって、読みの学習の基盤となる項目は、2から5と考えてよい。このうち「3 知覚的運動機能の条件」は、おもに視覚運動機能の調節・制御にかかわる発達とリズムの保持・模倣にかかわる発達水準として、「5 空間の構造化にかんする条件」は、空間構造化の能力と読みの能力の高い相関性として説明されている。「4 言語にかんする条件」は、象徴的機能の発達、コミュニケーションの質的な移行、口頭言語の充実の三点に集約している。「2 社会的条件と感情面」については、Mialaret は次のように述べる。子どもの発達のある様態を紹介して、

子どもは4、5歳になると、読み方をおぼえたいと思い、この時期にきわめて特徴的な模倣的行為をするまでになる。すなわち、子どもは好んで本や新聞を（正しく、あるいはさかさまに）手にもってすり、家族の者たちと同様に、からだの一部は動かさずに、目や頭をいくらかかりとも規則的に往復運動させ、ときには、いま「読んでいる」最中のお話を「物語る」ことさえする。たとえ子どもは読めなくとも、彼は読む人の行為の最も外面的な様相をとらえて、それを巧みにまねることはできたわけである。

と述べ、さらにJ.Piagetの「子どもの発達がつねに社会環境によって影響されることは事実であり、その社会環境は、たんに促進剤の役目をするだけでなく、それ自体が集団の歴史を背負った数多くの概念を、伝達する役目をはたしている」ということばをひいて、子どもに見られる「特徴的な模倣的行為」は「重要であり、これに留意すべきである」という。

さらに、「字を読むような準備訓練をまったくうけていない」子どもたちの例をあげ、

その子どもたちは、言語が記号によってあらわされるということさえ知らないのである。親たちは、彼らに一度も読んで聞かせたことがないので、彼らは本というものが、情報やおもしろいお話のみなものであることを知らず、また彼らは掲示板、ビラ、看板、新聞、告示などの世界に生きていないので、言語の印刷された形になじみがない。だから彼らは、ふつう印刷記号が広くもちいられている環境に育つ子どもがへていく、「それはなんという意味なの？」の段階に達しないのである。

と、家庭を中心とする社会的環境が子どもたちの読みの発達に深くかかわることを示唆しているのである。

また、感情的環境も無視しえない条件である。R.Zazzo の「たしかに子どもは模倣する…だがその模倣は、幼児においてさえも、たんなるしぐさのおうむがえしではなく、それは欲求や願望を表現しているのである」という発言を紹介しているが、こうした、模倣とはいえ読む行為にそくする感情の存在は、読みの学習のレディネストして動機付けの上からも、学習成果の位置づけの上からも重要なのである。

以上のMialaret が示した条件にてらせば、Bettelheim の指摘は、読みのレディネスは、決して並列的なものではなく、読むことへの社会的・感情的環境が他のレディネスを統合する構造として把握することができるということだろう。このように見たときにあらためて、小学校での読み方学習以前の読むことにかかわる経験や、そのための諸活動の重要性が明瞭に意識されるのである。

L.Bellenger は、「読書とは社会的なことがらなのである。子どもたちは、読むことを知る前に、書かれたものをふくむ環境に生きている」といい、「このことこそが、読みを学ぶ唯一の理由」と指摘する。とくに、二歳から五歳

にかけての子どもにとって、すなわち幼稚園に通う子どもにとって、「社会的な環境が、読むことによるコミュニケーションの価値に目をむけることを可能にする」。では、幼稚園ではどのような活動の中に読みへの糸口を見いだしたらよいのだろうか。Bellenger は、

図書室の隅の棚におかれた本や手でもちあつかえる玩具絵本、先生が書きためた子どもたちにおあつらえ向きの暗唱のための語句や文をとおして読書に親しむ。あるいは、郵便や通信は、読むことの感情的・情動的な価値を具体化するものである（たとえば、先生が書いてくれたみじかい手紙を離れたところにいる友達へ送るなど）。また、ラベルなどを上手につかって、読みの表象的な価値をしっかりと認識させることが大事である。

と子どもたちへの働きかけ方を具体的にあげながら、「先生は仲介者であればよい」という。「これとこれは同じことが書いてあるなどといった情報的機能、間違った場所に貼られたラベルを貼り直すといった訂正機能、すでに知っている単語を分類するといった組織化する機能」を示して、先生の援助は何をなすべきかを明らかにしている。読みの技術の訓練者でも文字や表記の教授者でもなく、子どもと読書とをつなぐ「仲介者」として働きかけることが求められている。

この点を、準備級にまで延長して、一つの指導方法として論じたのは、J.Foucambert である。

（読みの入門期が抱える）問題の解決は、読みの早期教育には求めることができない。わずかに、読書を実際に体験する中にその解答をみとめることができるのである。自然な環境としての学校で活動することを子どもたちに許すだけで充分である。…社会的な環境は、子どもたちが、コミュニケーションの上で有用であるものとして、読みの実地体験を積めるようでなければならない。

と述べて、学校という社会的な環境が、子どもたちの自発的な活動をうながし、その中で読みの体験を積みつつ組織的な読み方学習に向かう機能的な手だてを活用することを提案し、「早期教育と、読書へつながる機能的な方法とを上手に区別すること」の大切さを指摘している。

こうした、読みの技術的な側面よりも、読みの価値に目をむけた入門期ないしはプレ入門期の指導論が、フランスでは主流になりつつある。それは、先の文部省の通達の内容が反映しているともいえるし、逆に、入門期指導論の動向をふまえた文部省通達であったともいえる。事実、七七年の通達は、「数年にわたって全国の幼稚園視学官に意見や改革案を具申させ、その結果をふまえてアビ文相が執筆した」ものである。が、なによりも、読むという行為がたんなる自動行動ではなく、コミュニケーションや文化的な価値にもとづく社会的で内発的な行為にほかならないと、フランスの発達教育学が明らかにしてきたからであろう。

参考文献

- 現代心理学Ⅷ フレス、ピアジェ編 1971 白水社
子どもの読みの学習 ベテルハイム、ゼラン 1983 法政大学出版局
世界の幼児教育9 手塚武彦編 1983 日本らいぶらり
La Manière d'être Lecteur Jean Foucambert 1976 O.C.D.L-sermap
Les Méthodes de Lecture Lionel Bellenger 1980 P.U.F

店の主張

—タウンページの広告を資料として—

岸 本 千 秋

はじめに

世の中には、さまざまな職業があり、多くの会社が存在している。

資本主義社会では、他より多くの客を集めることが、会社の生き残る道であろう。そのために、経営努力をはかり、より良い製品を開発し、わたしたちに提供している。商品をハードとすれば、ソフトである宣伝・広告もまた、非常に重要な役割をもっていると言える。そして、同じようにその商品を売る店そのものも、宣伝・広告の対象となる。

反対に言えば、広告は、消費者にとって店を選んだり商品を選んだりする際の、大切な情報となるのである。その情報のひとつである「職業別電話帳(タウンページ)」に掲載されている広告を見てみると、大きく分けて、次の二つのタイプに分かれていることがわかる。ひとつは、具体的に業務の内容や商品の説明をしているタイプのもので、もうひとつは抽象的なイメージを強調しているタイプのものである。

そこで、本稿では、「店の宣伝」という場面を対象に、広告にはどのようなタイプのことが使用され、業種によってアピールのしかたが違うのかどうかという点に着目して見ていきたい。

調査方法

資料には、「タウンページ兵庫県阪神版」を使用した。そこに掲載されている職業の中から、次の業種に限って、広告に使われていることばを集めてみた。

- ・結婚相談所
- ・結婚式場

- ・葬祭業
- ・エステティックサロン、美容室
- ・探偵業

これらの広告の中で、なんらかのメッセージ性があることばを、データとして取り上げた。ただし、店の名前や、営業時間、電話番号などは省くことにした。データは、直接業務内容に関係する「業務関係のことば」と、いわゆる「キャッチフレーズ」として使用されているものに分けることができた。

たとえば、「お葬式ハンドブック進呈中」（葬祭業）という広告の、「お葬式ハンドブック」は、具体的な業務内容をあらわしている「業務関係のことば」とする。

「男だって気になる。女はもっと気になる」（エステティック）のような広告は、抽象的な表現を用いて、業務の宣伝というよりも、人の目を引くことに主眼が置かれているので、「キャッチフレーズ」とする。

調査結果

1. 結婚相談所（23社 業務関係98例/キャッチフレーズ15例 計113例）

結婚相談所23社の広告を見てみると、業務関係をアピールしているものが、キャッチフレーズの約7.5倍ある。

そこで、業務関係についてのことばを、何に重点をおいているかに着目して分類した。その結果、次の4つのボタンに分けることができた。

1.1 職業重視ボタン

- ・医師・弁護士・エリートサラリーマン・良家の子女
- ・医師・弁護士等の専門コースも設け、ハイレベルな出会い
- ・医師との結婚
- ・医師との最高の出会い
- ・会社経営者・弁護士・医者・会社員
- ・公務員を中心に一般企業の方も良縁の出会い
- ・エグゼ限定のエグゼクティブエクセレンス

これらでは、具体的に職業を特定して、特色のひとつにしている。

医師や弁護士、会社経営者などは、結婚相談所がアピールしたい代表的な職業であることを意味している。

また、具体的ではないが、「エグゼ限定」のように、「エグゼクティブ」つまり管理職や重役のみを紹介することを前面に出しているものもある。

ところで、

- ・一流会社の要請を得て、優秀な社員のためにお嫁さんを探し始めました

の文では、あきらかに女性に向けた広告であることが分かるが、先にあげたものでは性別は明記されていない。しかし、主に女性に向けた、男性紹介の広告ととらえてよいのではないかと思う。医師や、弁護士、または会社を経営している女性を求めて、男性が結婚相談所にやってくる可能性は、一般的に考えて低いのではないかと考えられるからである。

1.2 実績強調・信用度重視ボタン

次に、会社の今までの実績を具体的に表して、信用度が高いことをアピールしている広告をあげてみる。

(実績強調)

- ・交際率85%以上
 - ・成婚率抜群
 - ・業界屈指の高い成婚実績
 - ・創業25年の経験と実績
 - ・成婚第一主義
- など

「85%」や「25年」など、具体的な数字によって説得力をもたせようとしていることがわかる。

(信用度重視)

- ・選ばれた方の健全な会員制
- ・地域性を生かしたレベルの高い会員構成
- ・信用あるメンバーズ制
- ・官公庁OBが中心となって結成した権威あるブライダル組織

・ 一部上場地元有力企業との提携

など

「会員制」「メンバーズ制」ということばにより、信用できる相談所であることを言おうとしている。また、「選ばれた方」「レベルの高い」ということは、質の良さを強調していると言える。そして、「官公庁OB」が結成した組織であることや、「一部上場企業」と提携していることを言うことにより、安心できる相談所であることをアピールしていることもわかる。

1.3 ボリューム重視ボタン

これは、データの多さ、幅広さについてアピールしているものである。結婚相談所にとって、人は商品でもあるから、その商品の豊富さを言っている例である。

・ 100～200名の写真付データ

・ 4万人の中から決まるまでお世話

・ ヤングからシルバーまで豊富な会員層

・ シルバー世代也大歓迎

・ 年齢層は幅広く誠実な方ばかり

・ 年間100名ものご紹介&パーティ

など

ここでも、「100～200名」「4万人」「100名」などの数字を示して、より具体的な広告をしている。

商品が豊富であることは、信用があることを言うためにも効果的であると考える。

1.4 女性限定ボタン

2例しかないが、女性を日本人以外に限定している広告もある。

・ 外国女性

・ 中国・タイ・東南アジア女性

「外国女性」が、どこの国の女性をさしているかはわからないが、少なくとも「中国・タイ・東南アジアの女性」が、日本の男性にとって、なんらかの意味で好条件であるようだ。

日本の女性ではなく、外国の女性と出会う機会が持てるということも、結婚相談所のセールスポイントのひとつと思われる。

以上結婚相談所の広告における業務関係のことは分類してきたが、次に、結婚相談所のキャッチフレーズについてみていく。用例として、以下にいくつかを挙げてみる。

- ・あなたの愛のキュービット
- ・幸せの赤い糸
- ・結婚の港
- ・白い光、輝く花嫁
- ・栄光の結婚
- ・永遠の愛の始まり など

初めの3例は、結婚相談所について、あとの3例は、結婚（式）そのもののキャッチフレーズである。

2. 結婚式場（10社 業務関係33例/キャッチフレーズ25例 計58例）

結婚式場の広告についてみると、業務関係のことはとキャッチフレーズではそれほど用例数に差がなかった。

はじめに、業務関係について、以下の二つのボタンに分けて考察する。

2.1 説明型

- ・荘厳な結婚式、華麗な披露宴からー（中略）ーサービスと先進のアイデアで印象鮮やかに盛り上げます
- ・こんな結婚式を挙げたいという二人のこだわりをー（中略）ーきめこまかくサポートいたします
- ・結婚式までのすべてをプロデュースいたします
- ・愛にきらめくお二人のウェディングセレモニーを心を込めてお手伝いいたします など

これらは、結婚式や披露宴について、全体を包括的に説明しているものである。また、「盛り上げます」「サポートいたします」「プロデュースいたします」「お手伝いいたします」と、丁寧な呼びかけの言い方を用いて、親近感を出そうとしているようである。

2.2 結婚式の形態

- ・心暖まるキリスト教
- ・キリスト教式、海外挙式、レストランウェディング
- ・チャペルウェディング
- ・素敵にカントリーウェディング
- ・緑あふれる森で厳粛な結婚式

など

結婚式の形態にはいくつかあるが、キリスト教式（チャペル）での結婚式を前面に出しているものが比較的多かった。ほかに、仏前結婚や神前結婚などもあるはずだが、これらはまったくでてこない。現実には、仏前結婚も神前結婚もあるのだろうが、宣伝内容とはなりにくいのだろうか。

他方、キャッチフレーズとしては、次に挙げるようなものがあった。

- ・ときめく想いが、感動の瞬間がいつもあざやかに甦る、心に残る幸せのセレモニー
- ・神々が集い、二人の愛を祝う瞬間
- ・祝福の光につつまれながら最高の一瞬を華麗に刻む
- ・この日の幸せを永遠のものにするために
- ・永遠の愛を誓うお二人のために

など

「瞬間」と「永遠」ということばが、どのキャッチフレーズにも使用されていた。結婚式での感動を「一瞬」と形容し、喜びをより凝縮させた表現にしているようだ。結婚後の幸せについては「永遠」であるとしている。

3. エステティックサロン・美容室（29社 キャッチフレーズ32例）

エステティックサロン（以下、エステという）と美容室に関しては、「美しい」ということばが、双方に共通して多く使用されていた。また、他の業種と比べると、キャッチフレーズを使用しているものが比較的多かった。

そこで、エステと美容室については、キャッチフレーズに限って見ていくことにする。

3.1 「美」の追及

一番多く使用されていることばは、「美しい」であった。美しくなりたいと思う女性に向けた広告であるから、当然と言えば当然である。

[美容室]

- ・トータルな美しさを追及します
 - ・あなたの美しさ届けます
 - ・健康で美しい髪創りの店
 - ・優しく美しく磨かれて
 - ・美しい髪、より美しく
 - ・誰も知らない自分だけの美しさ
 - ・あなたの美しさをひきだす
 - ・髪美人になる方法教えます
- など

[エステ]

- ・あなたの中に眠る美しさを目覚めさせます
 - ・甦れ！美
 - ・新しく、美しい、日々のために
 - ・美しい素顔への近道は…
 - ・美しくなりたいと願うすべての女性に
 - ・もっと美しくきれいにやせたい貴女へ
 - ・年ごとに美しさをかさねる
 - ・素肌美110番
- など

3.2 個性の大切さ（美容室のみ）

- ・あなたの個性をひきだします
 - ・あなたの個性を演出する
- など

美容室に数例「個性」ということばが使用されているくらいで、アピールしたいことがらは「美しさ」のみのようである。

4. 葬祭業（17社 業務関係47例/キャッチフレーズ5例 計52例）

葬祭業に関しては、「心を込めて、誠意をもって」という気持ちをあらわ

すことばが多かった。また、その業種の特徴からか、キャッチフレーズと思われるようなものは非常に少なかった。そこで、業務関係のものだけを、以下の二つの類型に分けて見ていくことにする。

4.1 まごころ重視ボタン

- ・ まごころ葬儀を創造する
- ・ まごごろをつつみ心から心へ
- ・ まごころ葬儀をさせていただきます
- ・ まごころのこもったご奉仕
- ・ 誠実と奉仕のご葬儀を感謝の心でお送りする
- ・ ご遺族様に心を込めて

など

4.2 安心ボタン

- ・ 安心できるご葬儀なら
- ・ 大きな安心
- ・ ご葬儀一切をお引き受けいたします

など

葬儀の場合のように、人の悲しみにふれる場合は、とにかく「心」が商売道具の大きなポイントになっている。

また、葬儀は非日常的なことであり、しきたりなどがよく分からない場合が多い。そこで、すべてを任せても安心できると思わせることも大切なようだ。

5. 興信所・探偵業（27社 業務関係207例）

興信所・探偵業では、葬祭業と同じく、キャッチフレーズと思われることばはほとんどなかった。そこで、業務関係にはどのようなことばが使用されているのかをみていく。

取り扱っている業務について、細かく具体的に説明している広告が目立った。たとえば、「家出・行方不明調査」「裁判証拠収集」「企業資産調査」などである。

また、ほとんどの会社が「相談無料」や「安心な料金システム」など、料金について言及していた。‘調査費用が高額になるのでは’という依頼者の

不安に対応していると考えられる。

そして、一番多く使用されていることばは、「信用」と「実績」に関するものであった。以下にその用例を示す。

5.1 信用・実績強調ボタン

- ・ 精鋭、精悍な抜群の男女の調査員で構成した秘密機関で100%に近い解決率を誇っています
- ・ バイク部隊中心の機動調査は確実な報告書をお届けいたします
- ・ 調査はプロの私立探偵におまかせください
- ・ 科学機器使用で抜群の成功率
- ・ 永年にわたって築かれた信用と実績
- ・ 調査は組織力（調査技術）と社歴（信用）がすべてです
- ・ 信用を第一に考え秘密が漏れる心配は一切ありません
- ・ 愛と信頼のきずな
- ・ 調査するなら信頼のホットライン
- ・ 75年の伝統と最新の調査技術
- ・ 成功率は95%以上 など

他人の秘密に多く関わる業務では、「信用」「実績」があることは、重要なアピールポイントである。

5.2 女性に優しい興信所

また、女性を対象にした広告ではないかと思われる例がいくつかあるので、次に挙げてみる。

- ・ 経験豊富な女性相談員が無料で相談を承っています
- ・ 女性相談員がお伺いいたします
- ・ 女性相談員が親身になってお応えいたします
- ・ お客様の90%女性の方です。ご安心下さい など

相談員が女性であることをアピールしているのは、依頼者が、女性であることを想定しているためだと考える。

まとめ

以上、六つの業種の広告に限って、そこに使用されることばをみてきた。

全体的に見れば、奇抜な広告はなく、オーソドックスなものがほとんどであった。

テレビのように、映像を使って、視覚と聴覚にうたえることのできる広告に比べて、文字のみをたよりにする場合は、その方法も限られてくるのかもしれない。

業種ごとでは、業務関係のことばを多く用いて、業務内容を伝えることを重視しているものと、キャッチフレーズで人の注意をひくことを第一にしているものがあることがわかる。

エステ・美容室関係には、キャッチフレーズが多く使用され、反対に結婚相談所、葬祭業、探偵業では、ほとんどが業務関係のものであった。結婚式場については、両者にそれほど差はなかった。

エステ・美容室関係の業務には、どちらかと言えばはなやかなイメージがあり、ひとつひとつの業務内容を伝えることよりも、キャッチフレーズで人の心をつかむことが重視されている。美しい髪型や、整ったプロポーションを求めている依頼者に対応するには、具体的な業務関係のことばを並べるよりも、インパクトのあるキャッチフレーズの方が、より効果的だとされていると思われる。

それと比べて考えると、結婚相談所、葬祭業、探偵業などは、目立つことよりも陰で支える仕事というイメージがあり、特に、結婚相談所や探偵業などは、依頼者が、少なからず自分をさらけださざるをえない業務である。はなやかさよりも、依頼者の不安に対応するきめこまやかさや、希望する結果が出せる確かさなどが求められる。イメージを強調するキャッチフレーズとは、あまりなじまない業種だと言える。言い換えれば、エステ・美容室関係は人の外面の問題を扱う仕事であり、結婚相談所、葬祭業、探偵業などは、内面の問題を扱う仕事である。

結婚式場に関しては、それらが同じくらいの比重になっているが、それは、イメージを強調したい面と、業務の内容を宣伝したい面の両方があることを

示している。

今回は、タウンページを資料として、その広告からデータを取り出したが、他に、例えば流行語を生み出すこともあるテレビのCMや、雑誌の広告なども興味深い題材だと考える。今後の課題としたい。

彙 報

1) 所内会議

平成7年4月26日 平成7年度全体計画ほか

6月21日 研究所としての日本語教育への取り組みについて

7月19日 7年度「言語文化セミナー」について

9月20日 7年度「言語文化セミナー」について

10月18日 7年度「言語文化セミナー」事前打ち合わせ

11月15日 7年度「言語文化セミナー」反省会

2) 「LCレポート」の発行

第3号「いまどきの女らしさ」 詳細は本号の佐竹秀雄教授の論稿参照

第4号「おとなとしてのことばづかい」

3) 平成7年度言語文化セミナー

日 時：平成7年10月26日 14時40分～16時10分 S-24教室

テーマ：「いまどきの“女らしさ”」

コメンテーター：元京都府立大学教授 寿岳 章子氏

参加者：約250名（学内者約140名、学外者109名）

内 容：「女らしさ」という言葉に対する女子大生のもつイメージ調査の結果を「LCレポート」第3号にもとづき、本研究所以佐竹秀雄教授が発表し、それに対するコメントと主たる内容とする講演を寿岳章子先生からいただいた。

のように、恋情をうちあける、というような意味へずれて行っている。

次に「ほのぼの」についてみると、

そのをりの事のころを知り、今も近うつかまつる人々は、ほのぼの聞こえ出づるもあり。（源氏物語・幻）

のように、源氏が朝顔斎院や朧月夜に思いをかけていた頃の事情を知っている女房たちが、今は亡き紫上の当時の苦悩を源氏に語る場面で、よく知っていることを、少しずつ申し上げる様子を「ほのぼの」といつている。知っていることのうち、すべてを語るのではなく、その一部を語るのに「ほのぼの」を用いるのであるから、実態は豊かなものが、事情があつて少ししか表面に表れないという点で、語基「ほの」の意味を見とることができるといえる。

夜ほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。（伊勢物語・四段）

なども、朝の日の光がまだじゅうぶんに発現していなくて、しだいに明るさを増してくるであろうことが、「ほの」によつて表されているのだといえよう。

現代語の「ほのかに」「ほのぼの」などが、それらの語の背後に何となく明るく豊かで暖かいニュアンスを感じさせるのも、語基「ほの」のもたらす作用なのであろう。

限定にかかわることができないからである。

五

ついでに、「ほの」という語基を「ほのか」と共有するとみられる語、「ほのめく」「ほのぼの」にも触れておこう。「ほのか」の「か」は、「しづか」「のどか」「はるか」などの「か」と同じ造語要素であることに異論をさしはさむ人はあるまい。そして、これらの語が「しづ」「のど」「はる」という語基を共有しえ、「しづしづ」「はるはる」「のどむ」「はるく」など類縁関係のある語群（これを「同根語」という）をもっている。「ほのめく」「ほのぼの」などは、したがって、語義上、「ほのか」と類縁関係をもつはずである。これらの語が、「ほのか」と語義の上でどのような関係をもっているであろうか。

まず「ほのめく」について考えてみよう。

「もし、いささかのひまもや」と、このごろは、しげうほのめき給ふなりけり。（源氏物語・乙女）

の例は、雲井雁との恋が彼女の家族によって妨げられているために、求愛の意志を明確に表現することができないでいる。それらしい態度を見せることを「ほのめく」と言っているのであるから、障害が原因になって、大部分を内に押し込めているという点で、「ほのか」と類縁関係が認められる。また、

「かばかりまで、ほのめき給ふも、ただこの御ゆかり」と心得給へば、（狭衣物語）

は、狭衣がすでに一品宮の姫君となっているわが子に、会いたいという欲求をおさえながらも、行動の端々にそれが現れるのを「ほのめく」といつているのは、やはり明らかに意志を顯示するのに障害があり、外面にわずかにあらわれるという点で、「ほのか」と共通するものがある。それが時代を経ると、

女のもとへ通ひ路の、（中略）ほのめきあへる初めには、女も粧ひて、（謡曲「高安小町」）

態をいつている点が注目される。また、

亀山のあたり近く、松の一むらある方に、かすかに音ぞ聞こえける。峰の風か松風か、たづぬる人の琴の音か、おぼつかなく思へども、

(平家物語)

帝聞こしめして「あやしく尊く読経するものこそあれ。尋ねて召せ。」とのたまふ。藏人・殿上人馬に乗りて、ほのかに聞こゆる方をさし行くに、かみの宮に到りぬ。

(宇津保物語)

前の例は、「峰の風か、松風か」「おぼつかなく思へども」とあるように、琴の音であるか否かがはっきりしていないし、その音は時としてだえがちでもある。後の例ではその点、読経の声であることがはっきり認識されており、「聞こゆる方をさして」尋ねて「行く」のであるから、声はずっと続いている。「かすか」な音は断続的であり、「ほのか」な声は持続的であるのも対照的である。

このようにみてくると、「かすか」と「ほのか」の相違は、量的な差異ともみられないことはない。しかし、単に量的な大小のみによって、「ほのか」「かすか」が使い分けられるのであろうか。前の章でみたように、「かすか」は、主體的に認知しようとして行動をしても、精神的に集中しなければ認知できないのに対して、「ほのか」が用いられる場合には、その音なり光なりを「ほのか」ならしめている原因や理由が、音自体・光自体のほかに認められた。換言すれば、「かすか」なものは、その原因がその物自体にあり、「ほのか」と認識されるものは、その物の外に原因・理由がある。ということ、その原因や理由が排除されれば、もはや「ほのか」ではなくなるということである。逆にいえば、音や光の発生源においては、必ずしも微弱ではないのである。少なくとも、読み手・聞き手は「ほのか」ととらえられる光や音の背景に、ある程度の豊かな光や音を感じさせられているのではなからうか。現在、「ほのかにしか見えない」という言い方がしにくいのは、「ほのか」なものと、認知者との関係によって「ほのか」であったりなかったりするものではなく、それ以外に「ほのか」にさせている原因があるからで、見えるか見えないかは、認知者が「しか」という

では、「ほのか」である理由を「はるかになりて」と明示している。

その他、

風はげしう吹きふぶきて、御簾の中のにほひいと物深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。

（源氏物語・賢木）

は、風が吹いたことによって煙りが広範囲に広がり、薫りが淡くなったことをいい、

今は雨がちなり。しづやかに降りて暮らす日、ほととぎすかすかに鳴きわたり、月ほのかに見えたり。

（宇津保物語）

は、雨が降っているために、月が「ほのか」に見えるのである。

四

ここでは、類似した状況における「かすか」と「ほのか」の比較を試みよう。

波の声、秋の風にはなほ響き殊なり。鹽焼く煙かすかにたなびきて、とり集めたる所の様なり。

（源氏物語・明石）

風はげしう吹きふぶきて、御簾の中のにほひ、いともの深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。

（源氏物語・賢木）

前者は、もともと煙の量はそんなに多くはなく、消えそうな状態で線状にたなびいている。そういう状態のときには「かすか」が用いられているのに対して、後者は、香をたいっていたのが、風の吹いたことによって、広範囲に広がったのを「ほのか」といっている。本来の煙は必ずしも微量というわけではないのだろうが、この場合は風という原因が作り出した状態なのである。「かすか」な状態は作り出されたものではなく、もともと消えうせてしまいうような微弱な煙の状

などは、花の季節にまだ早く、やがて満開を迎える前の、ちらほら咲き初めた状態が「ほのか」で示されている。

以上四例は、いずれも、やがて「ほのか」ではなくなるにしても、そうならうとする過程において認知されたときに「ほのか」が用いられている。

右の諸例は視覚を通じて「ほのか」ととらえた例であるが、次に聴覚に関して用いられた「ほのか」についてみよう。まず、鳥の鳴き声については、

しづやかに降りて暮らす日、ほととぎすかすかに鳴きわたり、月ほのかに見えたり。(宇津保物語)
の一例を除いたすべての鳴き声には「ほのか」が用いられていること、そして、

短き夜の程なく明るる暁に、ほととぎすほのかに声うちし、さみだれたころほひのつとめて(宇津保物語)
のように、暁のまだ暗い時間帯に用いられている例の多いことが特色である。また、読経や人の声に用いられている例をみると、

遙ニ法花経ヲ読ム音許髣ニ聞ユ。……経ノ音許ヲ聞キテ、主ノ躰ヲ見ル事ヲ不得ズ。(今昔物語)

のような例がある。この例では、距離が遠く離れていて声は「ほのか」であっても、法華経を読んでいることが確かに認識できている点に注目しておきたい。この場合、「ほのか」であるのは、発声が微弱であるためではない。もしそうであれば、読んでいるのが法華経であることは覚知できないはずである。読経者と聞知者との間に距離があるために「ほのか」なのである。それは、

其ノ寺ノ北ノ路ヲ馬ニ乗リテ通ル間ニ、其ノ人聞ケバ、人ノ叫ブ音髣ニ有リ。(今昔物語)

においても同様で、叫ぶ人の姿は見え、声だけが「ほのかに」聞こえるということは、そこに若干の距離を想定させることになろう。

笛は横笛、いみじうをかし。……近かりつるが、はるかになりて、いとほのかに聞ゆるもいとをかし。(枕草子)

制する一方で、亡き柏木とともに偲ぶという、そんな鬱屈した思いが周囲の情景の「あはれさ」にもかかわらず、琴弾く音を「ほのかに」させている。また、

心ことなる調べをほのかに掻き鳴らし給へる、……（源氏物語・明石）

のような例では、琴を弾き洩る明石上に演奏を促すために、源氏は「ほのかに」掻き鳴らすのであって、場面での演奏の主体者は明石上でなければならぬから、源氏はむしろ強いて抑制した音で演奏しているのである。このようにみると、意識的であると無意識的であるとを問わず、抑制的心理のもとでの行動や行動の結果が、「ほのか」という状況で現出させていることに気付くのである。

さらに、

御さきの松明ほのかにて、いと忍びて出で給ふ。（源氏物語・夕顔）

はしたなくも、えいらへで侍りしものしたりしなり。ほのかなりしかばにや、何事も思ひたりしほどよりは見苦しからずなむ見えし。（源氏物語・宿木）

などの例になると、前者は「いと忍びて」という理由があるから、松明を「ほのかに」するのであるし、後者は、「えいらへで」いるうちに別れてしまったので、浮舟を見たのは「ほのか」だったと言っているのである。また、

我まだ親王なりし時、……春秋、文作りにもんして見しに、いまほのかに思出づるに、（宇津保物語）

この昔物語りは、……侍従といひし人はほのかにおぼゆるは、五つ六つなりしほどにや、（源氏物語・橘姫）

などの例では、「ほのか」である理由が、「昔」という時間的障害にあることが知らされる。これらは、語るうちに次第に記憶を取り戻してくるのであるが、はじめは、昔のことであるために「ほのか」なのである。さらにまた、

げに、まだほのかなるこずゑどものさうさうしき頃なるに、（源氏物語・藤裏葉）

花はほのかに開けさしつゝ、をかしきはどの匂ひなり。（源氏物語・幻）

さらに、声ばかりでなく、墨つきや墨色に関しても、しばしば「ほのか」が用いられた例が源氏物語その他に見られる。その場合、たいてい消息の書き手は女性、受け手は美しい男性であつて、その墨加減が「ほのか」なのである。源氏物語の場合、これを受け手の源氏は「心にくし」「あてはかに口惜しからぬ」といったような受け取り方をしており、そこにその女性のある種の心くばりを感じとっているようである。ということは、「ほのかに書く」ところにある種の行為とか人爲のあとが認められるわけで、それには、書き手の女性の恥じらいとか、つつましかさとかがそうさせている、といったような原因が考えられる。

また、

あはれにもをかしくも、思ひ出できこえたまふことなきにしもあらねば、なかなかほのかにてかく急ぎ渡りたまふを……（源氏物語・若菜上）

では、玉鬘が六条院から鬚黒邸へ急いで帰った理由として、以前六条邸に住んでいたころの源氏の自分に対する恋慕を思い出すだけに、かえつて六条院に長居することが憚られ、ほんの少し顔を見せるだけにとどめざるを得なかった事情を、「ほのかに」という表現であらわしており、

苦しと思ひつつ、先のかさうのこかの一手を、ほのかにかきならす。（宇津保物語・吹上・下）

は、難解箇所の一つで、要するに、帝から演奏を強いられて、一方では「苦し」と思いつつ、やむをえず掻き鳴らしたのを「ほのか」といつているのであるから、そこには演奏者涼の消極的心理が働いていることは否めないところであつて、それが演奏をおのずから控えめにさせたのを、「ほのかに」と表現しているのである。また、

風はだ寒く、ものあはれなるに誘はれて、箏のことをいとほのかに掻き鳴らし給へるも、おく深き声なるに……

（源氏物語・横笛）

の例は、柏木が死に、女三宮が出家したのち、夕霧が柏木の室落葉宮を訪れた場面で、夕霧は落葉宮に対する恋情を自

(枕草子・二〇一段)

帳の前に二所寄り臥し給へり。火の影ほのかなれば、いづれかいづれともわかれずおはします。(狭衣物語)

この枕草子の例中、「ものの上より」というのは屏風の上からであり、狭衣の「火の影」は壁代に映る影である。いずれも、光が屏風や壁代に妨げられ、乏しい光の中では物の識別がさだかでない状態を「ほのか」で表している。逆にいえば、屏風や壁代が仮になかったとしたら、「もののあやめ」も「火の影」も、もっとはっきり認識できるはずなのである。

心の及ぶまじきにも侍らねど、つつまし、はづかしと思ふに、ひがごともせらるるを、あいなし、すべて聞かれじと、ほのかなるけはひも見えし。(紫式部日記)

にしても、文面には書かれていないが、簾越しであることが「ほのかなる」という表現をとらせるのである(萩谷朴氏『紫式部日記全注釈』による)。

また、

御簾の前にあ給へば、御いらへなどほのかに聞こえ給ふ御声……(源氏物語・紅梅)

の用例では、「御いらへ」をしたのは宮の君が継父紅梅大納言に対してである。その宮の君は、引用箇所少し前の所で、「物恥ぢを世の常ならず」する女性だと記されている。「御いらへ」が「ほのか」であるのはそのためであって、恥ずかしさが、返答を小声で「ほのか」にしかさせないのである。このような例は、例えば、夕顔がはじめて光源氏と対面した時は、「光りありと見し夕顔のうは露はたそがれどきの空目なりけり」と答えた場面、中君が匂宮の接近にとまどって、「来し方を思ひ出づるもはかなきを行く末かけてなに頼むらむ」と詠む総角の巻の場面など、女が男への恥じらいを見せる場面の多くで、「ほのかに言ふ」「ほのかにたまふ」という表現が現れて来る。いずれも、恥じらいの感情が妨げとなって、声が小さいのである。

のである。

(A) の場合の「認識対象自体の認め難いほどの微弱な存在のありかた」にしても、(B) の「そのものの属性に似た物寂しいありかた」にしても、そのものの自体の消え入りそうな微弱さ、頼りなさを「かすか」が表現していると言える。

三

「ほのか」の方は、先にもふれたように、「かすか」に比べてその用例総数は遥かに多い。そして、一々の作品については必ずしも多いとはいえないけれども、『古典語彙対照表』の調査した作品のほぼすべての時代とジャンルとにわたって、その用例をみることができ、そして、辞書的な意味の範囲では、これらの用例の間に語義上の差異を認めることはできない。また、用例数が多いことにも関係があるうが、その用法は「かすか」に比べて一見雑然としており、使用場面もいろいろであるし、辞書や注釈書において与えられる訳語も、

あきらかならず。かすか。ほんのり。いささか。わずか。

など、多義にわたっている。そこで、一見雑然として見える用例を少し整理してみよう。まず、

むかひに立てたりける車に、女顔の下簾よりほのかに見えければ（伊勢物語・九九段）

實の子の中の程に立てたりける小障子の上よりほのかに見え給へる御有様（源氏物語・帚木）

などの例は、「下簾を通して」とか、「小障子の上から」とか、いわば、ものに遮られて見えにくい状態にある人物を、熟視しようとして、なお、見えにくいことを「ほのか」という語で示している。下簾や小障子のむこうにいる人物自体が、微弱な状態であるかどうかとか、寂寥にとざされているか否かとかは関係のないことなのである。

かたはらの光の、ものの上などよりとほりたれば、さすがにものあやめはほのかに見ゆるに、

のように、立つとか、枕をそばだてるとか、聞こえるようにする動作が必要なのである。これらの例からみると、聴こうとしても音自体が弱く小さいために、「認め難い」のであって、「かすか」は、そのような弱さ頼りなさを示していると言つてよいであらう。

『宇治拾遺物語』にだけ見える、視覚に關した「かすか」の二例は次のようなものである。

のどかに住みぬべき所やあるとよろづの所を見回しけるに、未申のかたにあたりて、山かすかに見ゆ。

(第一〇一話)

未申の方を見やりければ、山かすかに見ゆるに紫の雲たなびきたる。(第一〇一話)

これからも、見ようとする主体的意識は強いのであるが、山までかなりの距離があり、そのために山の形が「しかと認め難い」というものである。つまり、「かすか」は、視覚・聴覚いずれに關しても、認識主体からの距離等の原因による、認識対象自体の「認め難い」ほどの微弱な存在のありかたを示しているのである。

また、「物寂しく勢いのないさま」(B)「かすか」は、次のような例にみられる。

ただ、いと近う仕うまつりなれたるかぎり、七八人ばかり御供にて、いとかすかに出で立ちたまふ。

(源氏物語・須磨)

大宮聞かせたまひて、いと心細くかすかなる御里住みを……、(狭衣物語)

すなわち、不祥事をおこし、須磨に人目をさけて少人数で退出するとか、不本意な子供を身ごもっているため、人目を忍んで里住みをし、お産をするとかいったように、本当は活気のある華やかな生活を送って良いはずの人が、今は人目をさけてわびしい状態になっている時に用いられている。これらの例は、かつて華やかな貴族社会での生活を送った人であるだけに、現在の境遇が、いっそう消え入りそうなわびしい生活に感じられるのである。つまり、過去の生活との比較においてであるとはいえ、現在の生活自体が「かすか」なのであって、その生活の属性に似た状況が「かすか」な

源氏物語	八	一九
狭衣物語		一
今昔物語集	二	
金葉和歌集	一	
堤中納言物語		一
宇治拾遺物語	二	

右の表をみてわかることは、(B)の「かすか」が圧倒的に多く、その意味での使用が(A)の意味の場合に比較して早い時期から用いられているということである。そして、その意味の用法は平安時代を通じてほぼ不変であるということもできる。(A)の意味の「かすか」は、用例数が少ないので参考程度の意味合いしかもたないとはいえ、この表の上には表れていない数字で、「しかと認め難い」という場合の使用感覚器官としては、『宇治拾遺物語』だけが視覚に關してのものであるのに対して、それより前の用例はすべて聴覚にかかわっていることに注目しておきたい。

その聴覚に關した「認めがたいほどのかすかさ」は、例えば、

白妙の衣うつ砵の音もかすかにこなたかなた聞きわたされ……。 (源氏物語・夕顔)

夜ふかきあしたの鐘の音かすかに響く。 (源氏物語・総角)

のように、砵の音や鐘の響きなど遠くから聞える「響きをもった音」に關して用いられている。聞き手が、心を集中して耳を傾けなければ聞こえないほどの僅かな音である。それゆえ、

立ち給ふに、かのおはします寺の鐘の聲かすかに聞えて、霧いと深くたちわたれり。 (源氏物語・橋姫)

向かひの寺の鐘の聲、枕をそばだてて、「今日も暮れぬ」とかすかなる響きを聞きて、 (源氏物語・総月)

の二例だけで、他の作品には所出例がない。もっとも、『古典対照語彙表』の使用作品は、とくに早い時期のものは、竹取物語・土佐日記を除けば、歌集または和歌の出現比率の高い作品であり、和歌には「……か」の型の語は用いられず、代わりに「……けし」型の語が用いられるのが本則であるから、後撰集以前の作品に「かすか」が現れにくいことは言えても、「かそけし」が万葉集に二例だけで、それ以外には「かそけし」も「かすけし」も現れてこないという事実は注目しておく必要があらう。

二

『日本国語大辞典』によれば、「かすか」の語義を、

(一) やつと認められる程度に物事の度合のうすいさま、しかと認め難きさま。

(二) 人けがなく物寂しいさま。

(三) 勢いのないさま、みすばらしいさま。

とある。いまかりに、「しかと認め難きさま」を(A)、「物寂しく勢いのないさま」を(B)と二大別して、旧『日本古典文学大系』の注釈において「かすか」がどう解釈されているかをみると表2のようになる。

(表2)

	(A)	(B)
大和物語		一
蜻蛉日記		二
宇津保物語		三

徒然草	大鏡	更級日記	紫式部日記	源氏物語	枕草子	蜻蛉日記	後撰集	土佐日記	古今集	伊勢物語	竹取物語	万葉集
○	○	○	二	二七	一	二	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	二
一	二	二	二	一三七	四	三	二	○	一	二	○	八
○	一	○	○	一三	○	○	○	一	○	○	○	○
○	一	一	一	一九	○	二	○	○	一	一	○	一

右の表にみるように、「かすか」は「ほのか」に比べて遙かに用例数が少なく、ことに、早い時期の作品よりも比較の後になってから、現れて来る傾向がみられる。また、「かすか」の類語である「かそけし」にしても、『万葉集』にみえる、

夕月夜可蘇氣伎野辺に（四一九二）

音の可蘇氣伎この夕べかも（四二九二）

「かすか」と「ほのか」

清水 彰

「かすか」と「ほのか」との区別は何かあるのだろうか。現在のところ、この両者の語義上の識別は明確になされて
いるようには思えない。現在では「かすか」の方はともかくとして、「ほのか」という語は詩的語彙として用いられる
以外にはあまり使用されないようである。そして、これらの語を用いる場合でも、「かすか」の方は、「かすかに見える
だけ」とも、「かすかにしか見えない」とも、肯定・否定の両方の用い方をするが、「ほのか」の方は、「ほのかに見える
る」という肯定表現には用いられるが、「ほのかにしか見えない」という否定表現はあまりしないのではなからうか。
もしそうだとすると、その理由はなぜなのだろうか。それは、「かすか」と「ほのか」のそれぞれ本来の語義と関係が
あるのではなからうか。

こういった疑問を解くために、平安時代の仮名文学作品におけるこれらの語の使用例を調査してみることによって、
その違いを考察してみたい。

まず、宮島達夫氏『古典対照語彙表』によれば、「かすか」「ほのか」の類語の出現のしかたは次のとおりである。

（表1）《注》 1

かすか	かそけし	ほのか	ほのめく	ほのぼの
-----	------	-----	------	------

1996年6月25日 印刷

1996年6月30日 発行

編集者

武庫川女子大学
言語文化研究所

発行者

武庫川女子大学
西宮市池開町6番46号

(非売品)

印刷所

大和出版印刷株式会社
神戸市東灘区向洋町東2-7-2

MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY
ANNUAL REPORT
OF
RESEARCH INSTITUTE FOR LINGUISTIC
AND CULTURAL STUDIES

Vol. 7

JUNE, 1996

Contents

The Image of "Onnarashisa"	Hideo Satake
Japanese Language in Japanese Popular Songs	Toru Nishizaki
Meaning of Reading for Preschool Children	Masafumi Ichikawa
The Principle of the Shop	Chiaki Kishimoto
"Faint" and "Vague"	Akira Shimizu